

目的 人間の本質を行為の面から観察し一行住坐臥—つまり日常の起居動作の最も根源的なものとしての「坐」に焦点を絞り「坐」が衣食住及び人間生活全般にいかに関り形式を創り出して来たかを説明する。

方法 旅行(中国 韓国 西バキスタン 東欧 スペイン トルコ等)による見聞及び資料の蒐集により風土的比较と歴史的文献、博物館蔵文化財を参考に研究を試みる。

要旨 1. 坐の発生 人間生活の本質としての生活行為はもろまろの感覚器官を通じた体験したものの表現であり、表現は文化形式を形成する。行住坐臥は日常的行为をいうが人間進歩の過程は、定住して火と道具を使う行為にある。自的的行為は静止して「坐す」体立をとる必要がある。又筋力なくして生活不可能な古代の人間関係も「礼」の形式としての「坐」と生んだ。又 坐の形式の変遷と風土 ヒトの祖先サルは地面にうずくまり、母の胎内の胎児は手足をまげて羊水の中で安らぎ、古代韓国の慶州では屈辱を納めた瘡が発見されている。堅穴住居は天井が低く匍匐して出入せざるをえず、自然の成りゆきか坐の形式を生んだものと思われる。坐は羊坐は農耕民族、椅坐は狩猟民族の形式として我々国に入って来たが資料を参考に整理し変遷と風土の関連を考えてみた。平坐には「跪」「蹲居」「箕踞」がある。跪はロイマリーテを示す礼としてペルシアから東漸した形式であるが倭仏教の渡来とともに踏蹴坐、半踏蹴坐が入り禪宗から茶道が生まれ、神道と共に衣食住接客礼に多大の影響を与えた。特に墨敷の上に「正坐」する生活は日本の生活文化の独自性であり全般の生活形式に大きなかわりとなっていた。